

朱鍔歴只譜

生きたま

柴田鍊一

柴鍊歴史譚

集英社

生きざま

柴田鍊三郎

柴鍊歴史譚 生きざま

一九七六年三月二十五日 初版発行
一九七八年一月三十日 六版発行

定価 九五〇円

著者 柴田鍊三郎

発行者 堀内末男

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋二一五一一〇
郵便番号 一〇一

電話 出版部 二三〇一六三六二
販売部 二三〇一六一七一

印刷所 中央精版印刷株式会社
検印廃止

乱丁・落丁本はお取替えいたします

目 次

前説

池田家 心意気物語

11

井伊家 大老職物語

33

酒井家 軋封危難物語

51

浅野家 贗首物語

67

南部家 家格死守物語

91

閑話休題 醜男・美男子物語

127

大久保家 滅私奉公物語

139

紀州家 仇討物語

159

蜂須賀家 方策紙一重物語

加藤家 滅亡物語

竹中家 俗界嫌惡物語

保科家 婦女子之言不可聞物語

上杉家 智將一代物語

有馬家 化猫騷動物語

十八松平家 幕臣物語

後記

191

203

217

231

251

287

311

381

カバ
ー
江戸千代紙・菊寿堂いせ辰提供
扉
絵
東啓三郎

柴鍊歴史譚

生きざま

前 説

戦国の時世から、明治年間まで、滅亡することなく、生きのこり、その領土を守った徳川期の大名たちを、眺めると、その時代時代に、生き残らんがために、非常な努力をはらっている。

文字通り、時世に応じ、風潮にしたがって、かれらは、必死に、「家」を守り、その家を、子孫に残した。

どの大名に、どのような人物がいたか、また、その家臣にいかなる人物がいたか、私好みの人物をえらんで、かれらの行為を描いてみるのも、あながち、無駄ではあるまい。もとより、私は、歴史小説を書く資質を持つてはいないし、その意旨もない。

かれらの行為が、事実であったか、後世史家あるいは講釈師の作り話であったか——その人物の实在・架空を問わず、私は、自分勝手に、好みのエピソードをひろってゆくことにする。

すでに、読者諸賢が、先刻ご承知の逸話も採ることになろう。

大名家は、いわば、ひとつの会社である。会社を存続させるためには、主従とも、敢え

て、非道を犯し、卑屈な術策をめぐらし、無念の涙をのまざるを得ない場合がすくなくない。と同時に、その体制に反逆する人物も、当然、現れて来る。

まして、封建制度という極端な社会の中で、三百年近くも生き残るためには、ありとあらゆる手段を用いなければならなかった。

しかし、「家」も「人間」も、極端に不自由な掟と慣例にしばられていたからこそ、われわれを感動させる、おのが生命をなげうつ人物も現れたともいえる。忠節を尽したにせよ、反逆したにせよ、私は、そういう人物に、魅力をおぼえ、惹かれるのである。

心意氣物語

池田家



室町幕府は、同族の相剋と、家臣団の叛逆に満ちた歴史をのこしている。

その末期には、下剋上の風が起り、ついに百余年にわたる永い戦国時代に入る応仁の乱を醸した。今更、ことわるまでもないが、天下が四分五裂すれば、道義は、全く地を払う。

その乱世に、身を起し、優勝劣敗の巷に立ち、弱肉強食の力を發揮して、おのれが生きのこり、領地をきり取るために、主人、父親、兄弟をも平然と殺した者を初代とする大名と、江戸幕府が開設してから、大名にのしあがった者を初代とする家では、当然、その気風を全く異にしている。

戦国時代は、勝利か、しからずんば滅亡であつた。覇者となるために、手段をえらばなかつたのは、生存の方則にしたがつたまでである。

そのために、勇猛の士を麾下に加え、将兵をして生命をなげうたせるためには、大将として、おのれ自身が、武士としての面目を堅持しなければならず、また人間としての魅力を示さなければならなかつた。いささか、むつかしい諺ことわざをかりれば、『衆星の朗々ろうろうは、孤月の独明ひとりめいに如かず』であつた。

『国史眼』という本に、戦国武士の面目ぶりが、次のように、述べられてある。

『常に怯夫と輕侮せられざることに注意し、危難に勇進し、敵に会えば兵器を持たざるも向い進む。その勇まことに驚くべし。喜怒哀色に見^みわす^わすことを愧^はじ、士情を抑制する風尚あり。領地を奪われ財産を失うも、なお高大の容を示すこと旧の如く、親友にも憂苦を告げず、我、怯懦を示すをおそる。多言を賤^{いやし}み、告訴を怯とし、感覚の強きを婦女に比す。観念に強く、事業衰頹し、家産破滅に及ぶも神仏に祈念せず、また加護なきも怒罵することなし』

源平時代の武士にくらべれば、高潔な志操を欠いていたことは、事実である。しかし、これは、乱世に於ては、やむを得なかった、といえる。

かれらは、ひたすら、勝たなければならなかった。勝たなければ、おのれが減^へびるからであった。

黒田如水（孝高）は、羽柴秀吉の謀將となつて、さまざまな画策をやつたが、常に、胸中には、天下を取る野望を蔵していた。

一子長政が、関ヶ原の役に、徳川家康にしたがつて功名を挙げ、筑前五十二万石をもらい、そのことを悦びつつ報告すると、如水は、ほめる代りに、次のようにこたえている。

「お前の器量なら、まず、そんなところだろう。博奕を打つことに於て、わしとお前と比べれば、大差がある。わしは、もし、徳川内府と石田治部との戦いが、百日も手間取るようなことがあれば、九州より疾風^{はやて}のごとく東上して、武蔵・相模に押し入り、天下を取ってくれようと考へていた。その時は、徳川家の麾下に加わつて居るお前などは、見棄てることになるが、これもやむを得ぬと思つていた。天下を望む者は、親も子もかえりみていては、とうてい、望みをとげられはせぬ。お前には、わ